II—3　中国における日本研究

——日本近代文化の二重構造と日本文化研究の問題提起——

（議長　中根千枝）

発表　**高増傑**

一、中国の日本文化研究

……前置にかえて……

本日私は日本文化研究の一つの問題提起についてお話し申し上げますが、ご理解いただけるために、まず日本研究一般について簡単にお話し申し上げます。

中日両民族が大昔から緊密な文化交流と文化伝達がありました。その上、同じく東洋文化圏に属する両民族の間に古代から人物の往来がたえまなくありました。それだけに、日本民族文化に対する中国学者の観察と記述は昔からありまして、周知の「漢書・地理誌」、「魏誌・倭人伝」並びに「晋の山海経注記」による日本に関する記述等が今でも日本文化研究の貴重資料ばかりでなく、唐、宋より近代初頭に至るまで中国の官吏、商人、僧侶、文筆者並びに留学生達の日本記載と研究が数多く残っております。たとえば、黄遵憲氏の《日本国志》、魯迅先生の日本文化に関する見解等のように日本並びにその文化を詳細に研究する学者も中国の日本研究に重大な成果を残していることは既に周知の通りです。

一九四九年新中国成立以降、昔の研究をうけついで、中国における日本研究は大いに成果があがりました。五十年代より六十年代まで主として従来の日本研究者がおちついた研究環境がえられましたので、徐々に日本問題各分野の研究を軌道にのせつつありました。特に六十年代前半には数箇所の大学に日本研究所または日本研究組が発足しまして、本格的に日本研究を始めようとする時期になりました。しかし、周知のようにその後十年間の「プロ文革」の混乱があって、研究もほとんど停滞状態になっていました。一九七六年「四人組」の粉砕、特に一九七八年中国共産党十一期中央委員会第三次総会以降、学術研究全般が活発になると同時に日本研究も大いに発展してきました。それ以来、中国社会科学院日本研究所が発足しましたし、全国各地に合計で日本研究所が十数か所、日本関係の研究組またはグループが五十数か所出来ましたし、また日本関係の学会または研究会等学術団体も七か所成立しました。と同時に、研究者の数も大いに増えつつあり、今の所、研究機関の専任日本研究者、大学における日本関係の教育活動に従事する教育者並びに兼任日本研究者または教育者は合わせて約千四百名くらいあるとの計算になります。この基本概況からも窺えるように中国における日本研究はかなりのスピードで発展してきました。

日本文化研究は日本研究全体では近年来ウェートがだんだんと大きくなりつつあります。中国における日本研究は学科または分野がかなり細分化されております。かいつまんで言いますと、おおざっぱに分けても日本の政治、経済、歴史、哲学、文学等いずれも専門分野として勉強されています。数

年前までの情況から言うと、研究者の人数、論文の数量並びにテーマ選別の面では研究者として日本経済に関する研究、教育者として日本語の教育が多数を占めておりました。しかし、ここ三、四年来、変化の傾向がかなり明らかになりつつあるように思われます。即ち、

第一、日本経済の研究はかなり進展しておりますが、研究が進むにつれて、単なる経済学の理論だけではどうも解釈しにくい面が出てきました。特に七十年代末期から一部の研究者は日本近代発達の原因の一つとして〝人間〟というポイントを探る必要があると主張しておりました。それ以来、最初は教育、その次は経営管理、今の所では広義の日本文化へと研究者の興趣が段々と変わってきました。そのため、現在のところ、日本経済研究は依然として大きな流れにはなっていますが、すでに問題意識の変化によりまして、日本文化研究がかなりの程度盛り上がっています。

第二、中日国交回復以降、国家間と民間友好交流が頻繁になりましたので、日本語の勉強が盛んになりました。大学の日本語教育もかなり伸びましたし、日本語を教育する教師の数も七百名にも増えました。しかし日本語教育をしている中で、それが大きな壁にぶつかりそうになっていることに気がつきました。つまり、単なる助詞、単語文法等の教育だけでは学生が日本語の理解ができにくい、どうしても風俗等社会分野と日本人という文化分野がなければ本当の日本語教育が進まないのです。それで、数か所の大学の日本語教育部門が日本文化概要みたいな学科も開設し、あるいは日本文化研究組のようなグループも現れており、日本文化を教える教育者も育成されつつある状態にあります。

このように、日本文化研究部門が中心になって、大学の日本文化教育もすこしづつできるようになりましたので、中国では日本文化研究が今の所かなりの程度盛んになっており、文化研究者の数が数年前の百人くらいから専任、兼任を合わせて倍くらい増えました。日本の自国文化研究の発達や中日文化交流の発展と同時に中国の日本文化研究も今後大いに大きくなり、中国独特の研究成果が伸びて、先の見通しは明るいものと存じております。

二、横方向における日本近代文化の二重構造

前置みたいなところがちょっと長かったかもしれませんが、本文の理解に役立たせるために主として中国における日本文化研究の基本情況並びに問題意識について、ちょっとくどいことを申し上げたまでのことです。それでは、本日、日本近代文化研究の一つの問題提起をさせていただきたいと思います。

日本文化研究は時代区分によって古代、中世、近世、近代

並びに現代と色々な分けかたがありますが、歴史学的なアプローチはともかくとして、近代文化は特に大きな関心対象になっています。何故かと言いますと、各国と各地域の日本文化研究と同様に、中国の日本文化研究も当然のことながら、中国研究者の文化背景と自身の現状が研究に絡んでおりまして、研究活動にかなりの程度投影しております。それだけに、今日において、日本近代文化の変遷、過程並びに種種の現象が自然に研究者の目に見えて、研究対象の一つになっております。言い替えれば、これも中国における日本文化研究に関する問題意識の現れの一端とも言えると思います。

その視野からみますと、まず、日本近代文化の構造が大きな興趣点になっております。地理上の位置関係と歴史的条件によりまして、近代の日本文化は東西文化接触のポイントの一つになっておりました。時期的にも早かったですし、東西文化接触の一つのケースとして、その構造を究明することは東洋文化背景をもつ国国の近代化に種種の啓示が得られるのではないかと思われます。顧ってみますと、十九世紀六十年代以降、日本は明治維新を行って、それまでの歴史に沈澱してきた伝統文化を基礎にして連続しながら、西洋文化を意欲的にとりいれて、その文物制度等を活かして、西洋資本主義諸国よりずっと速い速度で近代化を実現させてきました。そして、その結果は現代日本文化の骨格になっております。このような立場でみますと、十九世紀六十年代から現代にかけて、日本近代文化には従来の東アジア大陸を基調にしてできた伝統文化とそれと異質な欧州地域を中心にしてできた西洋文化が併存し、両文化は摩擦を発生すると同時に、主として、調和よく補完関係にありまして、日本の近代化に大きな貢献をしました。

構造的に日本文化を見る視点はこれまでになかったわけではありません。オーストラリアのフイールズ氏は日本人に二面があって不可思議だと素朴な目でみていますし、〝雑種文化〟の説も一時唱えられていました。ですけれども、私がいっている日本文化研究の対象は広義の文化領域で、日本民族の人間が中心になっており、その精神構造、行動様式と思考パターン、またそれにより外化された文学、芸術、また服飾、建築までもこの「日本文化」の中に含まれており、人間の内なるものと顕在化されたものより構成された「文化体系」です。またここでいう構造的特徴は横即ち平面上と縦即ち上下層の両方にあるもので、立体的に日本近代文化をとらえたいと思います。ですから、おおざっぱに断定するのは危険ですし、うわ面だけでは文化の深層の解析にはなりえません。私の見たところでは、諸要素からなる日本近代文化という総合的文化体系、即ち日本近代の道徳、習俗、芸術、宗教、制度並びに思考パターン、行動様式等いろんな顕在形態に現れた

ものすべてにおいて、横の方向で、即ち平面次元で多くの文化領域に伝統文化と西洋文化が調和よく併存しています。

まず、簡単に分かるような生活文化の領域では近代日本人は衣食住の各面でいずれも東西文化の両方を併存させております。飲食の面において、伝統の魚介料理は大衆の普通飲食になっておりますし、おにぎり、おもち及び鯛等は欠くことならざる食物です。近年来、おせち料理ももちあげられておりますし、中国伝来の麺食は長い歴史で日本人の生活にとけこんでおりますので、しらずのうちに伝統生活文化の領域にもされています。一方、二十年代以来、パンとか、カレーライスとか、とんかつ等も普通の日本人家庭にはいりこんで定着しております。お付き合いの時、和食も重要視されていますと同時に、洋食ももてなしの好物です。服飾についていえば、明治大正時代以来、洋服はすでに多数着用されておりますが、伝統の和服、特に女性用の着物もいきています。普通の日本人は勤務と付き合いの場合は洋服ですが、自宅に戻ると、殆ど浴衣に着替えてくつろぐのが既に常識です。なお、欧米人が「うさぎ小屋」といっている日本住宅は小さいことは小さいですが、和間、洋間、リビングルーム等東西様式が殆どの場合両方ともそろっております。これらの現象は単なるうわ面の現象のように見えますが、しかし、東西文化併存の一例といえるのではないかと思われます。

その次、芸能という文化現象でもまったく同様といえると思います。たとえば、音楽の領域では、伝統的な幽玄と静粛を柱とする「邦楽」もかなり盛んになっていれば、西洋のクラシックとポップも愛聴者をひきつけています。流行の歌にしても、古代の流れをくんでおり、民間のメロデーを基調とする「演歌」は至るところに広がっていれば、西洋からつたわってくるロックも愛好者の拍手をえています。また、歌舞伎、お能と新劇も同様に上演されていますし、日本画と西洋式の油絵も互いに輝きを争っている状態にあります。これらの事実からいずれも近代日本文化の東西併存の状態が窺えると思います。

しかし、東西文化併存のもっとも代表的な意義をもつ分野はやはり近代日本文学といえましょう。明治以降文学界には「純文学」と「大衆文学」と二つの領域が長期間にわたってはっきり分かれていると同時に、それぞれ大きな発達をみています。このような併存状態は他の国ではあまりみられない現象です。

純文学はいうまでもなく、数多くの特徴をもっていますし、これまでの研究によれば、説が種々ありますが、東西文化の立場からみると、明らかに西洋文化に刺激されて生じた「西洋的文学」といって、まず間違いがないと思われます。純文学の作家達の経験とその作品の内容は十分にこれを裏付けて

います。

純文学の作家達はそれぞれ異なった生活背景を持っています。が、その圧倒的多数の人達は程度の差はあれ、西洋文化の洗礼をうけています。周知の通り、かなり伝統文化色彩のある夏目漱石でも長いイギリス留学の経験がありますし、最初の専攻がイギリス文学だったのです。また森鷗外はドイツへ赴いて欧州文化を実際に経験していますので、その時代の生活が彼の文学創作の源泉になっておりました。また「浮雲」によって近代純文学の嚆矢を放った二葉亭四迷はロシヤ作家ツルゲネーフ等からかなり栄養を取っています。北原白秋、志賀直哉等キリスト文化を身につけた作家たちはなおさらのことで、既に西洋文化の伝達者だったのです。

意識の面からいいますと、純文学には繁雑な諸流派がありますが、しかし、これらの作品に探求されている一番コアになっていることは一致しており、いずれも「自我」の追求がその中心になっています。「浮雲」はいかに自我の人生を生きるかというような問題ですし、正宗白鳥の「塵埃」も近代知識者の人生と「自我」の生き方をとりあつかっています。その他、島崎藤村の「破戒」は近代文学史上重大な意義をもっていますが、しかし、その基本的な底流意識が「個の解放と独立」といえるのではないでしょうか。「文学界」の青年たちは「人間の自由と解放」を目標としていましたし、白樺派は「自分たち人間の内部にある生命」あるいは「人類の意志」を表現しようとしました。一言でいえば、文化のコアとなっている精神構造の面からいいますと、純文学の標榜した「個」の追求は、日本文学にたいする西洋文学の投影にほかなりません。

また、創作の方法論からいいましても、純文学の作家は種々の創作理論と手法をだしましたが、しかし、その殆どが西洋文学界の文学理論と手法の導入またはその変形なのです。ゾラの自然主義、浪漫主義、また象徴主義とその後のダダイズム等種々の前衛的文学の方法論で日本近代純文学の中にその影を投じないものはほとんどありません。

このようにみてきますと、純文学は西洋の性格をもつ文学とみてまず問題ありませんが、しかし、その同じ文学の平面上に、これとまったく対立の極にある大衆文学が同様に繁盛しており、数多くの読者の心を捕えております。

文学の源流からいいますと、大衆文学の源は江戸時代の文学にさかのぼることができると思います。明治初期、日本流の「講談」は一時流行っておりまして、次に速記の形をとった連載ものが現れました。伝統の町人文化の気風をうけいれた作家、たとえば尾崎紅葉等は市井庶民の生活から素材を捜して金銭と愛欲を中心とする「風俗小説」等を作りました。それが嚆矢になって、純文学と陣を張って、大衆文学の領域

を段々成立させました。

大衆文学の柱としてのチャンバラ小説は殆ど歴史題材をあつかう作品群ですが、「大菩薩峠」等この系列の作品は日本歴史の義侠を主人公にして、「鞍馬天狗」、「眠狂四郎」等庶民の「英雄」を描いて、彼等の正義感に満ちた熱血漢の姿、剣の達人のすごさ、貧困者の救助等を通じて、圧倒的多数の庶民読者層をえています。もちろん、大衆文学も西洋的要素の影響をうけまして、SF、探偵推理等西洋的文学手法をとりいれたジャンルも生じましたが、しかし、その内容としては殆ど善悪醜美等で、やはり日本伝統思考を底流にして、伝統文化に根をおろして、その泥くさい雰囲気を漂わせています。

これまで申し上げたごとく、衣食住の生活文化、芸能と文学作品等殆どの近代文化領域では東西文化併存の二重構造を成しています。考えてみますと、明治以降の急激な西洋文化導入によりまして、このような異質文化併存の現象がある程度やむをえないことなのかもしれません。アメリカ文化人類学者ウィッスラーが「人間と文化」の著書で指摘したとおり、歴史の変遷につれまして、異なる民族と地域の文化は伝達による接触を行い、衝突と調和を発生します。時間系列からみれば、西洋文化と日本伝統文化は歴史発達段階的な差異があり、両者が接触して、異質な文化が互いに自身の特色を主張しあって、長い歴史時期において、両者が対照的な存在として併存するのはむしろ文化発達の必然的な現象なのかもしれません。それだけに、近代的な日本文化は平面上において、伝統文化と西洋文化がそれぞれ生きており、互いに影響しあうと同時に共同で平面上の二重構造をなしております。

三、縦方向における日本文化の二重構造

視点をかえてもうすこし観察しますと、単なる平面だけでは日本近代文化の構造はやはり説明しきれない所があると思われます。言いかえれば、日本近代文化は平面上ばかりでなく、縦方向で階層による文化層にも明らかに二重構造をなしております。結論を先にいいますと、比較的高い階層における各種の文化形態は西洋文化の影響を比較的多量にうけており、西洋文化の刺激によってそれなりの特徴を形成しており、いわゆるバタくさい色彩が濃い文化層が成り立っております。それに対しまして、比較的低い階層では従来の伝統的なものが比較的多く残っており、いわゆる泥くさい面がかなり濃厚に現れております。即ち東西の文化色彩がまったく違う上流文化層と底流文化層が併存しており、日本近代文化の縦方向において、二重構造を成しております。

日本近代文化の縦方向の二重併存構造は種々の文化形態と領域に現れておりますが、就中人々の習俗慣習と観念領域に最も典型的に現れています。ここで、日本近代の法律につき

まして、その縦方向の二重構造を私なりに説明させていただきます。

周知の通り、明治初期、日本は「入欧」の目標をたてまして、ドイツとフランスの法体系を参考にして、日本帝国憲法、民法、商法、刑事訴訟法等日本近代の法典を制作しまして、日本近代文化の現れの一つとして法体系を成り立たせました。いうまでもなく、日本近代法律は西洋文化の刺激によって出来たもので、その中に西洋文化的要素がかなりの程度入っております。これは日本近代化の印として急いで作ったもので、「文明開化」の一環と見なされております。それだけに法律そのものの底流に流れるものが西洋的な思考パターンであるばかりでなく、その用語も殆ど西洋法律用語の翻訳ばかりで、普通の国民が分かりにくいばかりでなく、無縁なものと見なされる傾向が強かったのです。その意味からいいますと、それは西洋の「伝統」文化を基礎にできたものと言えるし、日本の実際社会とかなり乖離した所が多いので、むしろ「文字上の法律」という意味がかなり濃厚にあります。もちろん、これは日本近代国家の文化として整備されたもので、重要視されていますし、また実際にも政府、役人達がこれによって社会行動を律するものとして働かせておりました。

しかし、西洋的な要素を織り込んだ文字上の法律というだけに、日本人の実際生活と無縁なものになりがちで、それと殆ど無関係に国民大衆の間に底流文化の一つとして、従来の伝統的な色彩の強い実際の法律行動の文化層が現実にありました。

たとえば、日本伝統文化では人間関係が和を中心にしてできており、集団の統一と調和を重くみております。もめごとがあったにしても、是とか非とかいうことは二の次で、「和が貴し」の論理がさきになってしまいます。ですから、日本近代法律ができたにしても、紛糾解決の文字上の原則がちゃんとあったにしても、普通の日本人は伝統の思考パターンと行動様式に従いまして、なにか紛糾があったらすぐかるがるしく法律に訴えることなく、いわゆる「調停」または「示談」という形を通じて、双方が相互の「善意」を「理解」して、うやむやにしてしまう場合が多数を占めております。たしかに近代社会になって以来、社会メカニズムがかなり複雑になっており、人間の利害関係も複雑になって来ていて、紛糾といさかいがかなり多く表面に出ているようです。しかし、統計によりますと、日本の訴訟件数は欧米諸国と比べてみると、その数分の一くらいしかありません。また、どうしても、解決がつかなくて訴訟に訴えても、完全に白黒まで究明するまでいかずに途中で知人の調停で和解が成立することが多いようです。ある統計によりますと、近代初期と中期、日本の訴訟件数の五十%ないし六十%が訴訟撤回あるいは双方和解で

終わってしまっています。このような実社会の法律行動から見ますと、国家制定の文字法律との間にどれだけ距離があるか明らかになったと思われます。

その次、日本近代初期の法律体系とくに民法は西洋の「個」の概念を十分にとりいれて制定されたもので、「契約」という法意識がその基幹になっているといえないことはないと思います。しかし、実生活の中では普通の国民はやはり伝統の「集団原則」にもとづいて行動していますし、互いに相手への理解を前提にしてその関係を処理する慣習がなお実際に生きています。たとえば貸与関係が発生する場合、公証することなくても私的な「念書」だけで双方が納得します。「契約」の意識が実際にかなり薄いもので、きちっとした契約を作るのがむしろおっくうなものと思われがちで、主として相互の「了解」で処理することが多いようです。よしんば公式の場で契約が調印されましても、必ずしも定量と定性の両方に渡って、完全にそれを履行するのではなくて、融通する余地の幅がかなり大きいようです。欧米の人たちがよくいいますように、「契約」中の日本流の「誠意条項」はあまりにも有名で、くどくどという必要はありません。要するに、「個」による「契約」の精神によってできた日本近代法律は上流文化層では役割を果たしていたにしても、普通国民の意識ではそれがむしろ「お上」のことで自身と縁がないと思いがちですし、実際の法律行動でもその「文字上の法律」と無縁の伝統的慣習に従って「善処」されている文化現象が著じいのです。

それと同様に、日本近代法律体系の底流にある「個」の観念と関連している「権利」の観念も同じことが言えると思われます。「権利」はもともと翻訳の法律用語で、どれだけ日本人の意識になじんでいるか、甚だ疑わしいとのことです。それはもともと西洋の「伝統文化」の「個」の観念から生じてきたもので、日本人の「集団優先」と思考パターンとは大変離れています。いうまでもなく、近代以来日本人の法意識も大変変わりました。しかし、それにしても伝統的な「集団」概念が頭の深層にこびりついておりますし、現代日本人の行動パターンからいうと、会社、村町あるいは種々の団体に所属する傾向が強くて、心理的に甘えて集団に依存するウェートがいまでもかなり明らかです。ですから、一方では西洋文化要素をかなり取り入れた法律という上流文化層がありながら、それと同時に、普通多くの法律行動においては、文字の条項とは無関係、甚だしい場合はそれに対立するような慣習によっておりました。伝統文化を背景にした慣習的行動では「有力者」とか、「年長者」とかの鶴の一声で問題が解決された場合もかなりあったそうです。まとめていいますと、近代国家の印として飾られていた文字上の法律とその下層にある伝統文化土壌に根をおろした法律の意識と実行動は、縦方向

の二重構造をなしております。実をいえば、上記の法律だけでなく、道徳、価値体系あるいは礼儀作法につきましても同様に上流文化層と底流文化層の二重構造をなしている所が多いのですが、この法律の例は、ある程度日本近代文化の縦方向の二重構造を裏付けていると思われます。

アメリカの文化学者ウッドードが指摘するように、文化は総合的な体系で、その中には帰納的なもの、審美的なもの、統制的なものといろいろな種類が包含されており、異なった種類の文化は変化の過程においてその速度が違っている。そのため異なった層ができ、かなり流動的なものもあれば、比較的凝固的なものもあるわけです。このような見方から見ますと、日本近代文化の縦方向の二重構造はむしろ異質文化との接触時に発生する当然なものといえるかもしれません。即ち、日本近代においては、数千年の歴史で鍛えられた伝統的な文化が連続している段階で、西洋文化が急激にとりいれられまして、異質な文化として日本民族の中に入り込んだのです。この西洋文化は一時期、古代より続いてきた伝統文化に遊離したものとして存在しておりました。短期間に、大量に、急激にはいりこんだ西洋文化要素はどうしても簡単に民衆生活、民衆意識の深層まで溶け込むことができず、あくまでも最初は表面で上流の文化層を形成し、その後、徐々に選択・淘汰されながら民族文化の深層に浸透していく外ありません。この場合、もともと民族文化深層では、従来の伝統文化がその力を保ちつづけており、上流のものと対照的に伝統的な底流文化層が依然として存在し、生きているのです。そのために、日本近代文化には西洋くさい上流文化層と伝統性格の強い底流文化層との、縦方向の二重構造ができてくるわけです。

四、二重文化構造の機能

上記の解析通り、私なりに日本近代文化の横と縦両方向の二重構造という問題提起をしました。あるいはこのような観察が短絡または誤差があるかもしれませんが、しかし、その問題意識としては日本近代文化のこの二重構造が東西文化接触による日本近代化の過程で重大かつ積極的な役割をはたしていたと思われる。それは主として二つの面が指摘できると思います。

まず第一、二重文化構造は巨大なクッションになっていると思います。それによりまして、外来文化の流入による衝撃はかなりの程度緩和されて、社会の安定を保ちえたのではないかと思われます。

明治維新当時、西洋文化が日本にはいりこんで、先進的な科学技術、理性的な思考様式等をもたらして、日本近代化の実現を加速させたといえます。ただ、それと同時に、西洋文化はあくまでも異質なもので、従来の連続してきた伝統文化

とかなりの程度において衝突を起こしうる可能性がありました。たとえば、人格の破壊、既存規範の崩壊あるいは価値体系の混乱等が発生して、社会が安定を失ってしまう可能性が潜んでいました。このような視点からみると、二重構造はむしろプラスの効果を果たしてきたのではありませんか。文化が二重になっており、両極の間に断絶とも連続ともとれるような関係ができており、一種の柔軟構造をなしております。一方ではかなりの程度西洋文化要素を取り入れられますし、他方ではその西洋文化を一定の局部あるいは階層に一時制限して、そこでふるいわけあるいは濾過を経ましてある程度の緩衝をしてから、外の層あるいは範囲に伝えていきます。文化の全体からみますと、局地で実験を行い、経験を積んで、消化または改造して、その中の有益な部分を他領域に広げていくことができます。と同時に異質文化との接触による衝突は一定の範囲に制限されて、過大の全面的衝突をある程度避けられる効果があります。そのため社会全体としては、その衝撃を社会自身が耐えられる限度内に抑えることができ、苦痛が少なくて済みます。そのため、ある程度社会の安定を保つことに寄与したのではないかと思われます。

その次、第二に、二重構造はまるで一種の伝達装置になっており、局部で外来文化の消化吸収をなしとげて、モデルをつくりましてから、それによる全体の文化発展を促します。

二重構造は両極をもっております。一極では西洋文化のとりいれとその消化を行います。他極では直接的な西洋文化との接触は比較的少ないのですが、前の極との間でたえまなく浸透あるいは影響しあいます。前者で西洋文化の選択と消化を行いますと同時に、有益なものを日本文化の有機的なものに変えます。あるいは民族文化土壌に合わないものを吐き出して、それを除外してしまいます。この過程で文化の調和によって変形が生じて、新文化の活力がほとばしります。それによってモデルができて、徐々に広がっていきました。

もしこのような視点より日本近代文化の観察と分析を行いますと、二重構造の問題提起が必ずしも無意味なものでないと思います。あるいはこのような言い方は一部の日本の人たちに抵抗があるかもしれません。というのは、日本文化は「純粋」なもので、その「浄化」を使命とし、日本文化を特殊なものと主張する人もあれば、西洋文化は普遍性をもって日本文化に追い付けないと唱える人もあります。「雑種」と主張する学者も主として歴史段階による文化の認定が中心で、民族文化の相対性に触れておりません。まして、二重構造といったら、混血を嫌う人達は気持ちがよくないかもしれません。だけど、私なりに言わせていただきますと、むしろ二重構造は日本近代文化の実態で、それがあったからこそ日本経済と社会の比較的順調な発達が生じたのではないかと思われます。

五、結び

前にも申し上げたように、日本近代文化は横と縦の両方向において長い期間にわたって二重構造をなしておりました。その解析には的はずれな所があるかもしれませんが、しかし、この二重構造という日本歴史上の文化現象はよく探求すべきところではないかと思います。

日本近代文化の二重構造は日本民族の近代化過程における文化現象として、東西両文化合流のケースの一つという意味をもっております。近代初頭、交通機関の発達によりまして、地球が狭くなって世界全体が通々になりました。こんな時代には日本というアジア海上の島国は東アジア大陸文化と東漸してきた西洋文化が接触して、その合流によって近代化が比較的高速に実現された実験場の一つとも見られます。その過程において、欧州民族の歴史を中心にしてできた西洋文化と中国大陸を基礎に成長してきた東洋文明との摩擦、衝突または調和、融合といった種々の文化現象が発生して、日本の近代文化ができたわけです。その間の東西文化接触による種々の現象または法則は豊富にあります。それを究明することは今日の日本だけでなく、また東西文化の国々にも大いに役立つだろうと思います。

もう一押しつっこんでみますと、日本文化には近代ばかりでなく、古代より固有のものと中国文化を基調とするアジア大陸文化が接触した長い歴史があります。今日人々がいう日本の伝統文化は実のところ、数千年の間中国大陸の文化を大量にとりいれて、それを消化・吸収したものにほかなりません。長い歴史において、稲作の東漸、仏教の伝播、唐文化の大量流入並びにそれ以降の文物及び人物等による文化交流があり、日本民族はそれらを咀嚼して徐々に大陸文化を自国文化の一部にして、近代前までの日本文化、即ち今日いうところの伝統文化を形成したものです。紙面の制限がありますので、それらの文化交流とその期間における日本文化構造を検討することはできませんが、しかし、簡単にいいますと、古代より近代前までは日本の文化も時代によって様相が違いますが、しかし、基本的にはやはり二重構造をなしている時期が長かった上に、そのような時期もかなり長かったのです。この意味からいえば、日本文化全体を構造的に究明することによりまして、同じ東洋文化圏における文化接触の種々な現象並びに東西文化の摩擦と調和といった様々な現象がそれぞれの方法論で解明することができます。これは非常に有益でおもしろい作業です。

考えてみれば、この研究作業は重大な意義がありますので、厳粛な姿でやらなければなりません。うまくやれば種々の啓示がえられますが、独断的なやりかた、あるいは今台頭して

いる大国意識でやれば、脇道にまよいこむ危険もないではありません。本当に人類文化の立場でこの問題を究明するならば、日本文化の構造的特徴は、世界にそれほど多くないケースの一つなので、日本文化の将来の可能性にも有益ですし、また人類文化の発展にもいいことではないでしょうか。

以上、甚だ繁雑ですが、一日本文化研究者の考えかたを説明し、日本近代文化の二重構造の解析を試みまして、日本文化研究のための一つの問題提起をさせていただきました。いうまでもなく、この中にはまだ多くの問題が含まれていますが、紙面の制限がありますので、他の機会にゆだねたいと思います。

コメント　**山本有造**

高先生のポイントは二つありまして、一つは中国における日本研究の現状の話と、先生ご自身の文化論でした。前者につきましては、高先生もその作成に当たられました「中国における日本研究」という、これは中国版と日本語版がありまして、最近、日本語版が国際交流基金から立派なパンフレットになって出ました。中国における日本研究の概要、それからwho's whoも入っておりまして、これが大変おもしろいのです。日本研究者ディレクトリーが半分と、何人の人がどういう研究にどういう形で従事しているかというサーベイも載っております。ただし、一九八四年の調査ですので、高先生がご紹介になったように、その後急激に変わっているのも事実ですから、改訂版をすぐ出していただきたいと思っています。

後半の近代化論については、高先生は「日本近代成功の意味するもの」とでもいうんでしょうか、小さな書物を出されておられまして、今日のお話はそれのエッセンスを話されたのではないかと思います。

結論から申しますと、日本の文化を二重構造としてとらえることについては、私も大体賛成ですし、大体そのとおりだろうと考えます。田中角栄がプレスに会うときには背広を着て下駄を履いているという意味で、西洋的なものと日本的なものが常に併存しているというとらえ方はまさにそのとおりだろうと感じます。

しかしここでは、若干の疑義と質問を一つずつ申し上げたいと思います。

疑義というのは、ここに挙げられた事例の幾つかですが、その中にはどうももうひとつふさわしくないものがあるように思われます。

例えば東西文化併存の代表的なものとして、日本文学の純文学と大衆文学を横の二重構造の例として出されましたけれども、この点についてはどうも本当かなと思うのです。田中角栄ぐらいのことだと併存はよくわかるのですけれども、純文学と大衆文学が西洋的なものとアジア的あるいは日本的なものとの併存の例だといわれると、本当かしらという気がしないではない。

もう一つ、縦方向にも二重構造になっているとおっしゃって、日本には上流文化層と底流文化層があるとおっしゃられると、はてまたこれもそうだろうかと疑問に思うのです。上流文化がないところが日本のまさに日本たる所以だと、私は考えておりますので、バタくさい面と泥くさい面があるという程度ならわかるのですが、日本の中に上流文化層と底流文化層とがあるといわれると、そうでしょうかという疑問を持たざるを得ない気がする。

法律の問題についても、こういう例でそういうことがいえるのかなと、若干気になります。そのへんが高先生の二重構造に対する疑義というか問題点です。

第二の質問と申しますのは、本日の報告に対しては若干無理な注文になるのは承知の上で申し上げますので、お答えはいずれということでも結構ですが、二重構造がそういう形であることはよくわかる。しかし、それが日本特殊的であることを中国の研究者である高さんはなぜだとお考えになるか。仮説でも思いつきでも結構なんですが、高さんのお考えを少し教えていただけると、我々にとって啓発されるところが多いのではないかと考えます。

中根　山本先生が出された問題に対して高さんからお答えいただく前に、皆さんも二重構造についてはいろいろお考えがあると思いますので、ほかの方からもお伺いしたいと思います。最初に、純文学と大衆文学について、キーンさんにコメントをいただけますか。

キーン　毎年のように、毎日新聞だと思いますけれども、日本の読者の調査をするんです。去年、一番おもしろく読んだ小説とかを聞きますけれども、大体においては大衆小説が選ばれてないんです。大体みんな「夏目漱石」がよかったとか「トルストイ」がよかったとか答えています。一番好きな音楽は何かというと、みんな「バッハ」と答えます。ですから、私は調査を信じません。調査の返事は調査のための返事で、本音ではありません。部数からいうと、どういう本がよく売れたか、それは確実にわかりますけれども、何が愛されたか、非常に熱心に読まれたかは別の問題だと思います。

確かに外国では絶対にベストセラーにならないような本が日本でベストセラーになっています。例えば数年前でしたが、難しい文学分析方法である記号法の本が十八万部も売れました。アメリカだとせいぜい一八〇〇部ぐらいでしょう。そして読んだ人はいるでしょうけれども、読んで理解したかどうかはわかりません。

こうしたことは日本文化の一つの特徴かもしれません。

山本　個人の中の上層文化と底流文化ならあるかもしれませんね。

中根　個人単位の二重構造ですか。

中西　今のキーン先生のお話につながるものですから、ちょっと発言させていただくのですけれども、今のキーン先生のお話を伺っていて、高先生の発想そのものが中国の国際的な研究なのかなという気がいたしました。

私はこの半年ぐらい中国におりますが、テレビを見ますと、常時出てくるものが二つございます。一つは孫悟空、もう一つは京劇なんです。中国の人はどうしてこんなに孫悟空が好きなのだろうと思われるぐらいに孫悟空は愛されている。また、飽きもせずというと高先生に申しわけないけれども、京劇のヒューンヒューンという唸るような声を聞いています。そしてその京劇の主人公はおおむね古典の主人公です。ですから、大衆に習慣的・生活的に愛されている読物は確かにあるわけですね。恐らくそういうイメージは、日本ふうにいうと大衆小説、例えば宮本武蔵とか三国志になるんじゃないかという気がするんです。

そこで私の質問は、日本における大衆小説と純文学のあり方を考えると、中国ではどうなっているのか、中国とどう区別されて日本の特色として高先生はおっしゃったのか、そこを伺いたいと思います。

李　日本の文化的特色は、欧米、また韓国、中国と一番違ったところは、専門的なものの大衆化なんですね。例えば、連句というのはものすごく難しい文学なんですが、日本の江戸時代では、町人までがそれを作って遊んでいました。また、数学の微分・積分みたいな高等な数学を、町人たちが賞品を賭けて遊びながらやっている。こういうことは世界的にも例がない。

現代ではどうかというと、工場ではQCサークルというのがあって、労

働者が十五分間ぐらい自分の考えたことを発表しますけれども、外国から見物に来た人たちはそれを見て、大学の教授がやっていることよりもすごいというんですね。

今の話題である文化論とつなげて考えたいのは、記号論が十八万部売れたが、果たして本当に読んで理解できたかどうかということは問題じゃないと思います。そういうことよりも、分からないのになぜそれを買ったのか、ということが問題になると思います。私が考えますのに、これはまさに知的好奇心なんですね。知的好奇心が日本の大衆は世界的にも珍しく強いんですね。

これを実証的に見れば、テープレコーダーとかVTRはもともと放送局なんかで使う専門的な機械なんですが、それを大衆化してカセット・テープレコーダーにしたり、VHSなんかでホームビデオを開発したのが日本の文化なんですね。放送局で使うものを茶の間に持ち込んだんですね。

こうしてみますと、大衆が難しい専門の話をしがちなのを、建前に過ぎないと言ってしまうのではなく、大衆的な人が専門的なものに対して非常な好奇心を持っている、ということ自体に日本文化の特色があると言った方がよいのではないでしょうか。

もう一つ言いたいことは、大衆文学と純文学が二重構造になっているという指摘ですが、よく見てみれば、どこの国でも大衆文学と純文学はあるのではないですか。こうした二重構造がない文化が果たしてこの地球上にあるでしょうか。

そうしますと、二重構造というのは日本だけの現象ではなくて、人類の共通の現象と言えます。どこの国の文学でも純文学と大衆文学はある。ただ、多くの国では、大衆は大衆文学を読み、専門書は専門家だけが読むのに、日本の大衆はものすごい知的好奇心があって、トルストイとかサルトルとか記号論を読む。専門家でもない人がそういうものを読むこと自体に、日本的特殊性があるのであって、文化の二重構造とは違ったものじゃないかと考えます。そういう観点から言うと、むしろ日本では上流と底流との差があまりないということなんですね。お前は大衆だから大衆のものをやれ、お前は専門家だから専門だけやれというのでは、ほかの国よりはギャップが狭いんじゃないかと思うわけです。

キーン　李さんの発言はおもしろく聞きましたが、私はちょっと逆説的なことを申そうと思います。

今の日本の現状は逆ですね。専門家が平気で俗悪なものを読んでいる国が日本です。マルクスの「資本論」がマンガ本になるし、あるいは最近は三島由紀夫がマンガ本になりました。それはほかの国ではちょっと想像もできない現象です。

ところが今でもアメリカの大学教授は、テレビを見ましたとは絶対に言いません。つまりテレビを見ること自体が、学者らしくないと見なされているからです。もしどうしても言わなければならない場合は、夕べ、たまたまおばの家に行ってら、それを見せられたというような言い方をします。自分の意思で、自分で進んで見たという印象を避けたいのです。

ということで、李さんがおっしゃったのとは逆の現象です。現代の日本では、上の人たちも下のものを喜んで取り上げるのです。

あるいはこうしたことは現代に限らないかも知れません。室町時代の貴族たちは、古い貴族的文化にだんだん飽き飽きしてきて、地方の田楽という踊りを都に呼び寄せたのです。つまり高級文化に飽き飽きした上の人達が、下の人達の新しい、気力のある、面白い文化を積極的に取り入れる。これも日本文化の一つの特徴です。

ネウストプニー　日本の大衆文化への関心は、最近、オーストラリアでも大変強く出てきましたし、ドイツにもあります。アメリカにもあるのではないかと思いますけれども、オーストラリア、ドイツ、アメリカの場合にはパラダイムから出てきている興味だと思うのです。パラダイムでは、日本の中のバリエーション、いろいろな種類のものに興味を持つというルールが含まれているわけです。高先生も同じようなパラダイムから出発していらっしゃるのでしょうか。それとも、何か別のパラダイムから別の目標

があって、出発しておられるのでしょうか。

中根　高先生もいいたいことがおありのようです。高先生は、今、皆さんがおっしゃったことがよくおわかりになったと思いますが、なぜ高先生が日本を二重構造と特にお考えになるかということなどもお答えいただきたいと思います。

高　私がお話したことは、二重構造という考え方も、単なる一つの問題提起として申し上げたまでのことです。

二重構造というのは、確かにどの国であれ、ある程度そういう現象はあると思いますけれども、しかし考えてみれば、日本の二重構造は、例えば中国、フランスのそれとはどうも違うところがあるんじゃないかと思います。というのは、例えば中国の礼儀作法のことを考えてみますと、宮廷の皇族の人たちには非常に厳しい礼儀作法がありますけれども、庶民の間にはそんなことはあんまりない。確かに、いわゆる上流のものもあったし、底流に流れているものもあるわけですけれども、日本の場合とちょっと違うところがあると思われます。簡単にいいますと、中国の場合は一つの民族文化の中の層なんです。あくまでもこれは同じ伝統の中のものだと考えてよろしいんじゃないかと思います。ですけれども、日本の近代におきましては、バタ臭いものと泥臭いものと源が同じであるかといいますと、そうではないんではないかと思うのです。こういう現象は、ある程度は途上国でも出てくるかもしれませんけれども、日本の場合、こうした異質な文化の二重構造というものが顕著なのではないかと考えたわけです。

中国はどうなっているのか、あるいはこうした考え方はどこからきているかというご質問ですが、簡単にいいますと、中国では、上流と底流はある程度あります。しかし、脈絡は大体同じで、底流のものは簡略式になってはいますけれども、大体上流のものと同じようなパターンが残っている。その源流をたどれば、大体同じところから出ています。

中西先生が孫悟空だとかおっしゃいましたが、日本の純文学、大衆文学という考え方で考えますと、孫悟空はどっちになるかと考えると、本当をいいますと困っちゃいます。孫悟空は大衆の方からもかなり読まれていますし、大衆の考え方もその中に随分入っているのですが、しかしそうはいっても「西遊記」という作品は中国の名作になっていて、純文学になっているんです。

一方、日本の明治時代、あるいは大正時代の名作といわれる純文学の作品を考えてみますと、ちょっと短絡的な判断かも知れませんけれども、いわゆる「自我」の追求ということがテーマになっていて、伝統的な物語や小説と狙いが大分違うように思うわけです。

中国の昔の文学は、いわゆる「詩は志を言う」といういい方がありますように、唐の時代、あるいはその前の時代から、インテリの人たちは何のために詩歌を作るかといいますと、自分の「志し」を他人に知ってもらうため、あるいは自分の中のものを表すためなのです。中国の文学作品は小説にしても詩にしても、確かに上下の差がありますけれども、同じ源を持ったものだと見てまず間違いないだろうと思います。ところが、日本の伝統の中には西洋的な「自我」を表現するというようなことは、ほとんどなかったのではないかと思うんです。

中根　外来のものという要素が非常に強く頭に入っていらっしゃるので、二重構造だと。上流と底流というのを問題にお出しになったので、ちょっと混乱したと思いますけれども、今のお答えで随分はっきりしたと思いますが。

山田　高さんのお話をちょっと補足したいのですが、孫悟空の『西遊記』が日本の大衆小説とどこが違うかということを申し上げますと、『西遊記』の冒頭に、世界が形成されてから孫悟空が生まれるまでの宇宙の歴史が書かれています。これは北宋の哲学者の邵康節の『皇極経世』という書物にみえる説の実にみごとな解説なんです。この『皇極経世』は、私の属しております研究所の初代の所長であった狩野直喜が、邵康節を地下から呼び出して聞いてみるのでなければ何をいっているのかわからんと評したほど難しい哲学書なんですが、その実にみごとな具体的な解説書になっている

んです。私は邵康節の哲学を知りたければ孫悟空を読みなさいといっているのですけれども、日本の大衆小説には、西田幾多郎の哲学を知りたければどうぞこれをお読みなさいという大衆小説は恐らくないのではないかと思います。そういう意味では、高さんが迷われるように、『西遊記』は大衆文学なのか純文学なのか区別できないと思われます。

ワーゴ　高先生が二重構造を指摘したところは有意義だと思いますし、私も日本の文化には二重構造があるように、直観的にずっと前から思っていたのですが、ただ単なる二重構造じゃなくて、いろんなところで二重構造が絡み合っているみたいな感じがするのです。

一つは、「上流のものと底流のもの」という見方と「外来のものと土着のもの」というものが絡み合っている場合がある。例えばお能は伝統的なものではあるが底流のものとはいえなくて、上流のものとしかいえない。ロックの音楽は、舶来のものではあるが、大概の人は上流のものといわない。

日本の上流、底流という現象には非常に面白いところがあって、赤ちょうちんに行ったら、労働者とか大学教授とか社長とか分からない。みんな同じところに行く。少なくともアメリカだったらあり得ないような現象です。このように非常に平等な思想もある片面で、別の場面ではものすごく二重構造が強いんです。

つい最近まで日本では「西洋のもの」と「現代のもの」が同じだと考えられてきた。底流にしろ上流にしろ、「西洋的なもの」だったら、進歩的でかっこいいと思われてきた。しかし「日本的なもの」が古臭という考えが、つい最近破れ始めた。例えば山本寛斎とか、ファッションの方では「日本的なもの」が国際的になってしまった。国際的に活躍する人たちが、西洋から習ったことを考えながら、自分の中に生きている日本の伝統的なものを、自分なりの総合的な形として作品にし出して、そこに普遍性を認められるようになってきた。純粋な伝統派から見ると、あれは本当の日本的なものではないと言われるけれども、外から見る人は誰だってあれは日本的だという。つまり日本的なものでも現代的、進歩的になり得るということになってしまった。こうしたところに新しい発想法が生まれてくるんじゃないかと思うわけです。

園田　高先生の話、非常に興味深く聞かせていただきました。二重構造については、さんざんな目に遭っておいでになりますが、高先生の中心的な問題意識は、大きなショックなしに異質の文化を大規模に導入するにはどうやったら可能かというところにあるんじゃないかと思うんです。「二重構造のファンクション」という観点は非常におもしろい思います。

もう一つは、中国における日本文化研究の位置です。日本の経済成長なり近代化なりの研究をやっていて、それだけじゃ不十分で、工場の管理方法とか経営理念とかを追求していくうちに、「文化研究」ということが出てきたと、高先生は言われました。この方向は、ネウストプニー先生のおっしゃる現代日本研究なり、ジャパニーズスタディーズと逆の方向をたどって来ているのかなという気がするんです。

中根　時間が来ましたので、最後に高先生と山本先生にひとことずつお願いします。今のお答えからどうぞ。

高　日本文化研究の位置づけということですが、パラダイムという問題で言いますと、私はどうもアメリカの研究、ドイツのそれとかみ合わないところがあると考えております。それは独特の歴史的背景によると考えます。簡単にいいますと、もちろん元々はジャパノロジーという考え方があったのですが、一九六〇年代の初めごろから転換がありまして、非常に細分化してやっていくと同時に、総体としてはどういうふうに見たらいいかという問題も出てきたのです。

しかし、その後、一、二年間ぐらいでプロ文革があったものですから、これでもう全部だめになっちゃったんです。そして十年間ぐらいのブランクがあって、復活したわけですけれども、今度はゼロから始めるといってもいいほどの状態になったのです。ですから、今度は総体の方をまずやって、その中の一つ一つを位置づけて展開していくというのが、現在では基本的にそういう考え方が非常に強いんです。

経済から文化へという基本的な流れということをお話申し上げましたけれども、特に日本経済を勉強している人たちは、ほとんど「機能」ということが頭の中にありまして、その問題意識が非常に強いです。理解というのは経済理論だけではわからないものですから、文化を勉強するという機運が高まってきたわけです。その底流にある考え方は、人類の文化は結局人間のものだから、人間を理解しなければいけないということです。

あと一つ付け加えさせていただきますと、私は二重構造ということで申し上げましたけれども、その中によく出てくる言葉として、伝統とか、舶来とか、バタくさい、泥くさい、土着という言葉がちょくちょく出てきますけれども、基本的な関心は、日本の伝統はどうなっているのかと、いうところにあるわけです。もちろんこれにはいろんな議論があると思いますけれども、私の考え方としては、ずっと一つの伝統が一本通っているところと、そうじゃなくて、ちょこちょこ横からいろんなものが入ってきて、交流のうちに変容していくところと、タイプとしては大分違うのではないかということです。

山本　私が本来申し上げるべきことを園田さんがおっしゃってくださって、私もそのことを一番最初にいわなければいけないと思っていました。私自身は、そうした意味では高さんの二重構造的把握はおかしくないし、私も賛成するということを最後につけ加えさせていただきたいと思います。